

中部地方域の方言についての方言地理学的研究(Ⅲ)

—中仙道域13要地点方言の対照研究—

江 端 義 夫

(1978年9月11日受理)

はじめに

1 ねらい

古来、京都と東京とを結ぶ中仙道は、文物交易の大動脈であった。東西二大言語文化の流動伝播事象が、今日の中仙道域の方言生活に、どのように認められるであろうか。

本稿で筆者は、中仙道域13要地点の方言の比較対照研究に従い、新旧首都を結ぶ中仙道域方言の実態を、明らかにしようとする。これは、「中部地方域の方言についての方言地理学的研究」の一部であり、「日本語方言生成史の研究」の一部である。

2 調査期間

○第1回調査

1974年4月18日～24日(7日間)

○第2回調査

1975年7月25日～8月5日(12日間)

○第3回調査

1976年5月16日(1日間)

3 調査地点

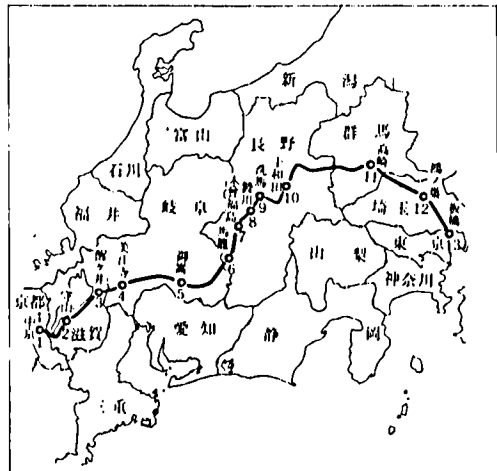
以上3回の調査によって、13地点での方言調査が行なわれた。調査地点は、中仙道69宿場のうちから、約6宿場めごとに1地点を定める方針で、13地点が選定された。それらは、以下の通りである。

- ①京都市中京区 ②滋賀県守山市今宿町 ③滋賀県坂田郡米原町醒ヶ井 ④岐阜県本巣郡巣南町美江寺
⑤岐阜県可児郡御嵩町 ⑥長野県木曾郡山口村字馬籠 ⑦長野県木曾郡木曾福島町 ⑧長野県木曾郡檜川村字贅川 ⑨長野県塩尻市洗馬 ⑩長野県小県郡和田村字上和田 ⑪群馬県高崎市菊地町 ⑫埼玉県鴻巣市滝馬室 ⑬東京都板橋区

4 方言資料提供者

各地点で、原則として①土地生えぬきて、②60歳台の女性1名を対象とした。13地点における資料提供者は、以下のとおりである。

- ①岡田ハツ(71歳, 明37生) ②川島操(57歳, 大7生) ③矢野密枝(60歳, 大4生) ④伊藤きぬ



第1図 中仙道要地点図

- え(71歳, 明37生) ⑤吉田みさを(56歳, 大8生)
⑥勝岡ふくゑ(67歳, 明40生) ⑦百瀬安代(73歳, 明40生) ⑧深沢富代(53歳, 大11生) ⑨納川久江(68歳, 明39生) ⑩伊藤かなめ(50歳, 大14生)
⑪藤巻コウ(68歳, 明39生) ⑫岡田久枝(60歳, 大4生) ⑬伊藤りめ(63歳, 大1生)

5 調査の方法

質問項目を用意し、質問調査に従った。その項目は、表現法項目33, 語アクセント項目81, 文アクセント項目56で、合計170が小体系を成す。この際、語彙についての項目は、割愛した。

— アクセントについて

上記13地点について、語アクセントおよび文アクセントの存立状況を分析すると、およそ、次の4類が認められる。

A類(地点1・2が同じで、3以下と対立する。)

B類(地点1・2・3が同じで、3以下と対立する。)

C類(地点1と2と3とが各々異なり、4以下が同

じである。

D類(その他の個別の様相を示す。)

以下、A、B、C、D類のそれぞれについて、考察する。

1 A類について

A類には、合計11の型がある。それらの中で、最も出現語数が多くて、目立つのが、(A-1)型、(A-2)型である。

(A-1)型；(1(中京)・2(守山)／3(醒ヶ井)・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13)

- エー・エが／エ・エが(絵)
- イネ・イネが／イネ・イネが(稲)
- マツ・マツが／マツ・マツが(松)
- フナー・フナが／フナ・フナが(鯛)
- ミドリ・ミドリが／ミドリ・ミドリが(緑)
- マドー・マドが／マド・マドが(窓)
- マコト・マコトが／マコト・マコトが(誠)
- カイコ・カイコが／カイコ・カイコが(蚕)
- ウル／ウル(売る)
- キル／キル(切る)
- ク／ク(食う)
- ヨム／ヨム(読む)
- ウカブ／ウカブ(浮かぶ)
- アソブ／アソブ(遊ぶ)
- オキル／オキル(起る)
- トケル／トケル(溶ける)
- ナイ／ナイ(無い)
- ヨイ／ヨイ(良い)
- アキが クル／アキが クル(秋)

※※※※ ※※※※

- カク／カク(背く) 但し、⑥はカク
- セナカ・セナカが／セナカ・セナカが(背中)
但し、⑤はセナカ・セナカが

アクセント例137のうち、21が、上の型を示した。

次の(A-2)型は、(A-1)型よりも数が多く、137例中の26である。

(A-2)型；(1(中京)・2(守山)／3(醒ヶ井)／4(美江寺)・5・6・7・8・9・10・11・12・13)

- ヒー・ヒが／ヒー・ヒが／ヒ・ヒが(火)
- カー・カが／カー・カーが／カ・カが(蚊)
- イキ・イキが／イキ・イキが／イキ・イキが(息)
- アキ・アキが／アキ・アキが／アキ・アキが(秋)
- タタク／タタク／タタク(叩く)
- スズシー／スズシー／スズシー(涼しい)
- ハヤク オキル／ハヤク オキル／ハヤク オキ

ル(早く起きる)

- コーリが トケル／コーリが トケル／コーリが トケル(氷が溶ける)
- ユが ワク／ユが ワク／ユが ワク(湯が沸く)
- ミドリが ウツクシー／ミドリが ウツクシー／ミドリが ウツクシー(緑が美しい)
- テオ タタク／テオ タタク／テオ タタク(手を叩く)
- ツミオ ユルス／ツミオ ユルス／ツミオ ユルス(罪を許す)
- タライデ アラウ／タライデ アラウ／タライデ アラウ(盥で洗う)
- ホソオ ヨム／ホソオ ヨム／ホソオ ヨム(本を読む)
- エニ アラワス／エニ アラワス／エニ アラワス(絵に表す)
- ココロが ワカイ／ココロが ワカイ／ココロが ワカイ(心が若い)

※※※※ ※※※※

- イネが ミノル／イネが ミノル／イネが ミノル(稲が実る) 但し、⑤はイネが ミノル
- ウシト アソブ／ウシト アソブ／ウシト アソブ(牛と遊ぶ) 但し、⑤はウシト アソブ
- マコトオ ツクス／マコトオ ツクス／マコトオ ツクス(誠を尽す) 但し、⑤はマコトオ ツクス
- クシオ サガス／クシオ サガス／クシオ サガス(櫛を探す) 但し、⑥はクシオ サガス
- クスリ・クスリが／クスリ・クスリが／クスリ・クスリが(薬) 但し⑨クスリ・クスリが
- カイコオ アツメル／カイコオ アツメル／カイコオ アツメル(蚕を集める) 但し、⑩はカイコオ アツメル
- イキが ナガイ／イキが ナガイ／イキが ナガイ 但し、⑩はイキが ナガイ
- カナシー／カナシー／カナシー(悲しい) 但し、⑩はカナシー
- ラユが クル／ラユが クル／ラユが クル(冬が来る) 但し、⑫はラユが クル

これらの例によって、地点3のアクセントが、中間的状况を見せていることが知られる。

さて、A類のうち、前二者よりきわめて少なく、個別的なアクセントの存立状況を見せる型は、以下の9型である。

(A-3)型；(1(中京)・2(守山)／3(醒ヶ井)／4(美江寺)・5・6・7・8・9・10・11(高崎)／12(鴻巣)・13)

○ココロ カナシ-/ココロ カナシ-/ココ
ロ カナシ- (心は悲しい)

○コニ シタガウ/コニ シタガウ/コニ シタガ
ウ/コニ シタガウ (子に従う)

(A-4); (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
/4 (美江寺)・5・6・7・8・9・10・11・12
(鴻巣)/13 (板橋))

○クスリ オ ウル/クスリ オ ウル/クスリ オ ウ
ル/クスリ オ ウル (薬を売る)

(A-5); (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
/4 (美江寺)/5 (御嵩)・6・7・8・9・10
・11・12・13)

○アタマ・アタマが/アタマ・アタマが/アタマ・ア
タマが/アタマ・アタマが (頭)

○キズが イタム/キズが イタム/キズが イタ
ム/キズが イタム

※※※※ ※※※※

○ハイル/ハイル/ハイル/ハイル (入る) 但し、
⑨⑩は ハイル

○ハナが サク/ハナが サク/ハナが サク/ハ
ナが サク (花) 但し、⑫は ハナが サク

○モミジが イロズク/モミジが イロズク/モミ
ジが イロズク/モミジが イロズク (紅葉)
但し、⑬は モミジが イロズク、⑭⑮は モミジが
イロズク

(A-6)型; (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
/4 (美江寺)/5 (御嵩)/6 (馬籠)・7
・8・9・10・11・12・13)

○ケ-ケが/ケ-ケが/ケ・ケが/ケ-ケ
が/ケ・ケが (毛)

(A-7)型; (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
/4 (美江寺)/5 (御嵩)/6 (馬籠)・7
・8・9・10・11 (高崎)/12 (鴻巣)・13)

○ハジメが タイセツダ/ハジメが タイセツダ/
ハジメが タイセツダ/ハジメが タイセツダ/
ハジメが タイセツダ/ハジメが タイセツダ (初
めが大切だ)

(A-8)型; (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
/4 (美江寺)・5 (御嵩)/6 (馬籠)・7
・8・9・10・11・12・13)

○トオトイ/トオトイ/トオトイ/トオトイ (嬉しい)

○アメワ アマイ/アメワ アマイ/アメワ ア
マイ/アメワ アマイ (餡は甘い)

(A-9)型; (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
/4 (美江寺)・5 (御嵩)/6 (馬籠)・7
・8・9・10・11・12・13)

○ハオ キル/ハオ キル/ハオ キル (葉を切る)

○ウスイ/ウスイ/ウスイ (薄い)

(A-10)型; (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
・4・5・6・7・8 (費川)/9 (洗馬)/
10 (上和田)/11 (高崎)・12 (鴻巣)/13 (板橋))

○マツが オオイ/マツが オオイ/マツが オ
イ/マツが オオイ/マツが オオイ/マツが
オオイ (松が多い)

(A-11)型; (1 (中京)・2 (守山)/3 (醒ヶ井)
/4 (美江寺)/5 (御嵩)・6・7 (木曾福
島)/8 (費川)/9 (洗馬)/10 (上和田)/11
(高崎)/12 (鴻巣)/13 (板橋))

○フロニ ハイル/フロニ ハイル/フロニ ハ
イル/フロニ ハイル/フロニ ハイル/フロニ
ハイル/フロニ ハイル/フロニ ハイル/フロ
ニ ハイル/フロニ ハイル (風呂に入る)

(A-10)型と(A-11)型とでは、アクセントの同
じ型を示すものが、地点を隔てて出現することがある。
そのため、斜線の数が多くなっている。

2 B類について

B類には、合計7つの型がある。紙幅の都合で、A
類のごとく、具体的に、個々の語のアクセント状況ま
で記述することはできない。当型に所属する語例と文
例とを掲出する。

(B-1)型; (1・2・3 (醒ヶ井)/4 (美江寺)
・5・6・7・8・9・10・11・12・13)

○チ-チが/チ-チが (血)

これが、B類中で、最も優勢な型である。「血」以外
に、以下の語が所属する。

柿、花、心、涙、聞く、飛ぶ、消す、握る、蹴る、
沈む、驚く、高い、低い、若い

合計15の語が、(B-1)型を示す。同様に、文例で
所属するのは、以下のものである。

ボールを蹴る、音が高い、火を消す、背が低い、
雲が低い、涙が浮かぶ、命は嬉しい (合計7)

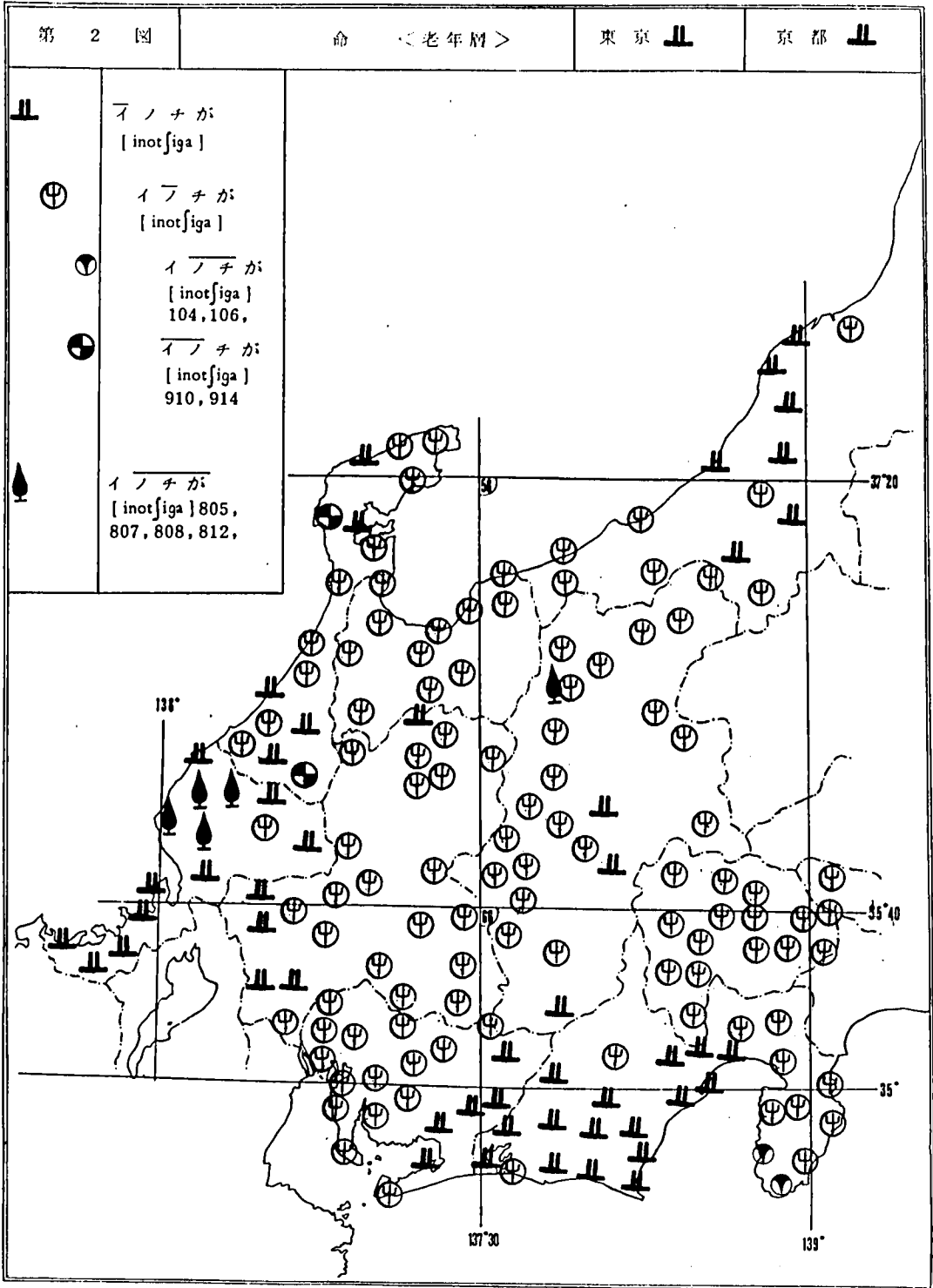
語例と文例とを合計した22例が、(B-1)型を示す。
B類に所属し、(B-1)型以外のものは、比較的わ
ずかである。以下、簡略に、型と所属語とを記す。

(B-2)型; (1・2・3 (醒ヶ井)/4 (美江寺)
・5・6・7・8・9・10・11・12 (鴻巣)/13 (板
橋))

○イノチ/イノチ/イノチ (命)

○カジニ オドロク/カジニ オドロク/カジニ
オドロク (火事に驚く)

ここで、中部地方域における語アクセント「命」の
図を考察する。



第 2 図 命 <老年層>

第2図「命」は、1976年3月から1976年10月までに、筆者が臨地調査によって得た資料にもとづいて調製したものである。原則として、土地っ子の、60歳台女子が、被調査者である。

第2図では、東京と京都とで同じ形を示す「イノチ」の分布が、中部地方独特の隆盛な「イノチが」によって、分断されている状況を示す。

頭高のアクセントの「イノチが」は、京都から滋賀県、福井県、石川県にたどられ、岐阜県の西部にも見られる。他方、静岡県下や、愛知県の東三河、新潟県の中部でも、「イノチが」というアクセント形が強力に分布する。これは、近畿的な「イノチが」が古く伝播して、ここに留まり残ったものであろう。幸いにも、現代東京語と同じ形の「イノチが」であったため、異和感なく、受容されてきたか。昨今は、共通語として、「イノチが」が急速に、若年層中心に、広まろうとしている。これは、さらに新しい動きである。

中部地方の方言の特性が、第2図「イノチが」の分布に、明瞭にあらわれているのである。

(B-3)型；(1・2・3(醒ヶ井)/4(美江寺)/5(御嵩)・6・7・8・9・10・11・12・13)

○エー・エが/エ・エが/エ・ヒが(H)

これに所属するものは、次のとおりである。

音、冬、雲、歌を聞く、鹽、餡

(B-4)型；(1・2・3(醒ヶ井)/4(美江寺)・5(御嵩)/6(馬籠)・7・8・9・10・11・12・13)

歌、甘い、遠い、田舎は遠い、

(B-5)型；(1・2・3(醒ヶ井)/4(美江寺)/5(御嵩)/6(馬籠)・7・8・9・10・11・12・13)

毛が薄い

(B-6)型；(1・2・3(醒ヶ井)/4(美江寺)・5・6(馬籠)/7(木曾福島)・8・9・10・11・12・13)

力、力が強い、葉

(B-7)型；(1・2・3(醒ヶ井)/4(美江寺)/5(御嵩)/6(馬籠)・7・8(費川)/9(洗馬)/10(上和田)・11・12・13)

多い

以上、B類は137例中40例であるが、そのうち、22例が(B-1)型で占められている。ここでは、地点1・2・3の一体性が強調されたことになる。

3 C類について

地点1・2・3が、それぞれ異なった型をし、4以下が同じ型を示すのがC類である。C類中で語数の多

いのが、(C-2)型である。

(C-2)型；(1(中京)/2(守山)/3(醒ヶ井)/4(美江寺)・5・6・7・8・9・10・11・12・13)

○アラワス/アラワス/アラワス/アラワス(表わす)

これに所属するのは、次のものである。

許す、傷、湯、初め、水、頭が良い、文字を書く、血が出る、蚊が飛ぶ、鯛が泳ぐ、集める、悲しむ
地点1・2・3の不安定なのに対して、4以降が、一団となっていることが知られる。(C-2)型以外の型と所属語とを、次に記す。

(C-1)型；(1(中京)/2(守山)/3(醒ヶ井)・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13)
牛、田舎

(C-3)型；(1(中京)/2(守山)/3(醒ヶ井)/4(美江寺)/5(御嵩)・6・7・8・9・10・11・12・13)

二つが良い、稲、恨みが無い

(C-4)型；(1(中京)/2(守山)/3(醒ヶ井)/4(美江寺)/5(御嵩)/6(馬籠)・7・8・9・10・11・12・13)

背中がかゆい

(C-5)型；(1(中京)/2(守山)/3(醒ヶ井)/4(美江寺)/5(御嵩)/6(馬籠)/7(木曾福島)・8・9・10・11・12・13)

帆が見える

(C-6)型；(1(中京)/2(守山)/3(馬籠)/4(美江寺)/5(御嵩)・6・7・8・9・10・11(高崎)/12(鴻巣)/13(板橋))

窓を開ける

(C-7)型；(1(中京)/2(守山)/3(馬籠)/4(美江寺)/5(御嵩)・6・7・8(費川)/9(洗馬)・10・11(高崎)/12(鴻巣)/13(板橋))

つるべ

(C-8)型；(1(中京)/2(守山)/3(馬籠)/4(美江寺)/5(御嵩)/6(馬籠)/7(木曾福島)・8・9・10(上和田)/11(高崎)/12(鴻巣)/13(板橋))

小麦

4 D・E・F・G類について

これらは、C類の流れをひくものである。しかし、地点5から11までが共通している。所属語は、各1例ずつである。

D型；(1(中京)/2(守山)/3(醒ヶ井)/4

(美江寺)・5・6・7・8・9・10・11(高崎)
/12(鴻巣)/13(板橋)

紅葉

E型: (1(中京)/2(守山)・3(醒ヶ井)/4
(美江寺)/5(御嵩)・6・7・8・9・10・11
・12・13)

二つ

F型: (1(中京)/2(守山)/3(醒ヶ井)・4
(美江寺)/5(御嵩)・6・7・8・9・10・11
・12・13)

○サ^アラ/サ^カク/サ^クク/サ^カラ(咲く)

G型: (1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・
11(高崎)/12(鴻巣)/13(板橋))

従う

さて、以上のA, B, C, D類を一括して、図表で
表わしたのが、表1である。(論文末に掲出。)

模様相異は、アクセントの型の相異を表わす。A
型あるいはB型で、地点1・2あるいは地点1・2・
3が同じ斜線模様になっている。これは、地点1・2
あるいは地点1・2・3のアクセントの型が同じであ
ることを意味する。しかし、Aの11型の地点1・2、
あるいはBの7型の地点1・2・3のアクセントの型
が、すべて同一ではない。

表1から、各類中での代表的な型をとりあげ、対比
させてみる。

(A-1) : (A-2) : (B-1) : (C-2)
=21:26:22:13

これによって、地点3の特殊性が、色濃く認められる。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
(A-1)	_____												
(A-2)	_____												
(B-1)	_____												
(C-2)	_____												

地点3は、アクセントに関して、東の方言の特色と、
西の方言の特色と同じ程度にかねそなえている。また、
地点3独自のアクセントも、(A-2)型や(C-2)
型で見られるように、かなり顕著である。甲種乙種ア
クセントの接衝地域における特異状況^(註2)を、ここに、認
めることができる。

二 表現法について

以下には、文表現法項目33によって得られた13地点
での実例を記述しつつ、中仙道における諸事象の存立
状況を、見てゆく。

33項目のうち、比較的明瞭な分布差の認められる19項
目について、どのような変相が存するかを考察する。

1 (1(中京)~5(御嵩)ノ6(馬籠)~13 (板橋))の対立相

(1)「そんなことをするな。」(禁止表現)

地点1の京都市中京区から、地点5の岐阜県可児郡
御嵩町まで、「〜シタラ アカン」類の言い方が見える。

○ソ^ナナ コト シタラ アカン ガナー。そんな
ことをしたら、だめだよ。<中下>中京

○ソ^ナナ コト シタラ アカン ㄱ。 そんなこ
とをしたら、いけないわ。<中>守山

○ホ^ナナ コト シタラ アカヘン ガー。 そんな
なことをしたら、いけないじゃないの。<中>醒
ヶ井

○ソ^ナナ コト シチャー アカン ワ。 そんな
ことをしては、いけないわ。<中>御嵩

このように、条件発想法によって禁止表現を仕立てる
という、一特色が見られる。また、それと同類の発想
で、間接的に禁止命令するものがある。

○セント オキ ヤー。しないでおきなさいね。

<F>中京

○セ^スト オイテ チョーダイ。しないでおい
て下さい。<上>御嵩

ところが、地点6の馬籠から地点13の板橋までは、「〜
スルナ」ばかりである。

○ソ^ナナ コト スル ナヨー。 そんなことをす
るなよ。<中>木曾福島

○ソ^ナナ コト スル ナ。<下>板橋

時に、「〜シチャー イケナイ。」などがあるが、稀
である。

(2)「これは、私のです。」(自称代名詞)

対等関係で「私」と言う時、地点6(馬籠)、地点
9(洗馬)、地点12(鴻巣)では、「オレ」「オレン」
を使う。その他の地点では、対等の人間関係で、「ワ
タン」「ワシ」も)を、女性が使用している。「オ
レ」系の言い方が、「ワタン」系のものよりも、
古いようである。

(3)「おあがりなさい。」(尊敬法助動詞命令形)

京都では、対人表現に、上中下の差別なく、「〜
ヤス」尊敬表現の行われることが、多い。

○マー アガッ^トクレヤス。 まあ、上ってください
さい。<上>中京

御嵩の「〜ヤス」は、次のように聞かれる。

○イ^キャー^タ。 行きなされた。(青女→青女)

○マー アガリ^ヤ。 まあ、あがりなさい。(親
しみのこもった言い方)

○女の子がすぐ、チュ^ーモン シャ^ータ。 女の

が、すぐに注文しなされた。(中女→中男)
御嵩では、「ヤス」と「セル(なさる)」とが、一文中で、同等の品格に立つ。それは、次の文例で知られる。

○オカシナ コト イヤース ナ イワッセル。
おかしなことを言いなさるなって言いなさる。(老女)

当該事象の分布相をとりまとめれば、次のとおりである。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13
(「ヤス」), (「ンショ」「マショ」), (「ナサイ」)

以上、事象の境界が、地点5と6との間、地点8と地点9との間であることが、知られよう。

(4) 「休まないで、早く歩け。」(打消中止法)

京都市中京区から御嵩まで、「ンデ」「ント」の2言語形式が聞かれる。

○ヤスマンデ ハヨー アルケ。醒ヶ井

○ヤスマント ハヨー イリヤー。美江寺

馬籠では、「ヤスマズニ」を言う。木曾福島から七和田までは、「ンデ」が聞かれる。

○ヤスマンデ トンデケ。休まないで、走っていけ。上和田

高崎から板橋までは、共通語ふりの「ヤスマナイデ」が聞かれる。

上の結果は、『口語法分布図』(国語調査委員会、明治39年)の「第9「いで」「ないで」等ノ分布図」の図柄と酷似する。

(5) 「もう熱は、出はずまい。」(打消推量)

「デーヘンヤロ」「デーヘンヤラ」が、京都から御嵩までである。

○モー デーヘンヤロ ナー。<中>中京

○モー ネット デーヘンヤロ ナー。<中>守山

○モー コレヤッタラ ネット デヤヘンヤロ。

<中>醒ヶ井

○ネット デーヘンヤロ。<中>美江寺

○マー ネットァー デーヘンヤラー デー。<中>御嵩

馬籠から東方の上和田までは、「ズラ」「ラ」が聞かれる。

○モー ハイ ネットァー デンズラー。<中>木曾福島

○モー ネットァー デネーズラニ、<中>洗馬

高崎には、「ダラー」がある。これは、「ズラ」「ラ」の地域に含まれる。

○ネット デナイダラー。<上>高崎

鴻巣と東京とは、関東「ペー」の地域だが、板橋では、

「ペー」でなく、「デショ」「ダロー」が回答された。鴻巣は、「ペー」である。

○モー ネット デナカンペー。<中>鴻巣
これらをまとめれば、次のとおりである。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13

(「ヤロー」「ズラ」「ダラ」) (「ペー」「デショ」)

(6) 「この手紙を読んでください。」(謙讓法)

地点1と地点11とを除いて、「オクレ」「クレ」が広く全域に行なわれている。

○コレ チョット ヨンドクレヤス 男。<上>守山

○ヨンデ オクレ ヨ。<中>高崎

「チャーダイ」が、きわだって聞こえるのは、名古屋文化圏の色濃い所である。守山から御嵩までに、「チャーダイ」が聞かれる。

○コレ チョット ヨンデ チャーダイ。<中>守山

○コノ テガミオ ミテ チャーダイ ヤ。<中>御嵩

「チャーダイ」は、若い人たちのことばらしさがあると いわれる。同等以下へのもの言い、聞かれがちである。

京都では、
○スマセンテド ヨンデー ナ。<中>

のような言い方が、心やすい人に対して言われる。上品に言えば、

○スマセンテド ヨンデ イタダケマセンヤロ
カー。<上>中京

と、打消疑問の形で、表わされる。

鴻巣や板橋では、「クダサイ」を主とする言い方が行われている。

(7) 「人家訪問のあいさつ」

人家訪問のあいさつとして、時候のあいさつが、中仙道全域で、行われている。朝昼晩に、「オハヨー、コンニチワ、コンバンワ」が聞かれる。

地点1(中京)から地点5(御嵩)まで、近畿的表現として、「ゴメンヤス」が行われている。費川、洗馬では、「イタ カネー」という過去時制で、家人の在非を問う。京都から木曾福島まで、現在時制の「オル カネー」がある。

2 (1(中京)~3(醒ヶ井)/4(美江寺)~13(板橋))の対立相

(1) 「そうですか。」(断定法)

地点1(中京)から地点3(醒ヶ井)まで、断定の助動詞に、「ドス」が使用される。

- イヤー。ソードス カ。<中>中京
- ソードス ナンタ。<上>守山(だめ押し)
- ホードス カー。<上>醒ヶ井

地点4(美江寺)以東では、「デス」「ダ」ばかりである。たとえば、木曾路の馬籠について例示すれば、次のとおりである。

- ソーダ ナーシ。そりですよねえ。<上>
- ソーダ ノイン。そりよねえ。<中>
- ソーダ ナー。そりだな。<下>

(2) 「こっちへ来い。」(命令形)

「オイデ。」「オイデ ヨ。」などの言い方が、全域にある。

「キー。」「キー ナ。」などの近畿的な言い方が、地点1(中京)から地点3(醒ヶ井)まで聞かれる。

- コッチー キー。<下>(子供へ怒って言う時)

- ハヨー コッチー キー ナ。<中>(年下へ)

また、上と同じ範囲(1~3)に、「キトオクレヤス。」などの「ヤス」がある。

- スミマセンゲド コッチー キトオクレヤス ナ。

<上>中京

- コッチー キトオクレヤス。<上>守山
- コッチー キトオクレヤス ナ。<上>(主に女)

醒ヶ井

先に、人家訪問のあいさつで、「ゴメンヤス」が、地点1~5まで聞かれた。ここでは、「ヤス」の使用範囲が狭くなっているのが、注目される。

地点4(御嵩)から地点9(洗馬)まで、「キテクダサイ」(上態)が聞かれる。板橋では、上態が、「コチラエ イラッシャイ。」である。

(3) 「きょうは、暑(い)く寒(い)ね。」(文末詞)

上態本位に見れば、地点1(中京)から地点3(醒ヶ井)まで、「ナー」が中心であり、「ネー」よりも優位に立っている。

○アツイ コトデ ゴザイマス ナー。<上>中京
それに対し、地点4(美江寺)から地点7(木曾福島)まで、やはり、「ナー」系文末詞が隆盛である。

特に「ナモン」が特筆される。

- キョーワ アツイ ナモ。<中>美江寺
- アツイ ナモ。<上>御嵩
- キョーワ サブイ ナーシ。<上>(地主などへの言)馬籠

○ゴンチラー。アツイ ナーシ。<上>木曾福島
「ナモ」や「ナーシ」は、「ナー」+「モーシ」からの転である。地点1~7は、「ナー」主流の域である。地点8~10までは、「ネー」と「ナー」とが半々くら

いの使用状況である。地点11~13ともなると、専ら、「ネー」である。

(4) 「先生が来た。」(尊敬法動詞)

「先生が、ミエタ。」というのが、全地点にある。

- センセーカ° ミエマシタ。<上>中京

「キハッタ」とするのは、地点2(守山)から地点3(醒ヶ井)までの特色である。盛んである。

- センセーカ° キハッタ。<上>守山
- センセーカ° キハッタ エー。<上>守山
- センセーカ° キハッタ。<上>醒ヶ井

「先生」が話題であれば、ごく自然に、「~ハッタ」が表現される。と土地人は教示する。

「ゴザル」^(1, 3) 尊敬法動詞は、地点3(醒ヶ井)から地点9(洗馬)まで、点々と行われている。

○センセーカ° ゴザッタ。<上>(主に老人)御嵩
ていねいな言い方であるが、古風なため、「ゴザル」を十分に使用しうる人が、少なくなった。

「オイデタ」が、地点1(中京)から地点10(上和田)まで見られる。ところが、「オイデ」系の言い方は、先に、「こちらへ来い」(命令形)の項目で、全域に認められた。ここで、その領域が少なくなっているのは、両者の文体の差によるかと考えられる。

3 (1(中京)~6(馬籠)/7(木曾福島)~13(板橋))の対立相

(1) 「あれを見る」(命令形)

「見る」の連用形「ミー」を、命令用法に転用したのが、地点1(中京)から地点7(木曾福島)まで、点在する。

- アレオ ミトー オミ。<中>中京
- チョット アレオ オミ。<上>木曾福島

さて、地点1(中京)から地点6(馬籠)までは、近畿的な「ミヨ」命令形が行われ、地点7(木曾福島)以東では、「ミロ」が行われる。これは、明治以来、すでに周知の事実である。

もう一つ、「ミテ ミ。」という言い方が、中等以下の品位で、全地点に行われている。

(2) 「辞去のあいさつ」

辞去のあいさつについて、発想法に注目して分類する。

抽象的な発想法の、「スミマセン。」「シツレ〜。」「ゴメン クダサイ。」は、**わび**の姿勢とされる。「オセワニ ナリ〜。」「オジャマ シマシタ。」「オシマダレ カケテ〜。」は、相手への**なりかわり**の姿勢で、礼を述べるものである。「アリガト〜。」「オーキニ〜。」「ゴチソーサマ。」は、話者の**感謝**の心情である。

以上によって、中仙道域13地点の当該挨拶表現を分析すると、次のようである。

感謝の発想は全域に見られる。なりかわりの発想が地点7(木曾福島)以西に見られる。木曾福島以東には、わびの発想が著しい。挨拶の発想の傾向は、木曾福島を分岐点として、西側が聞き手本位であり、東側が話者本位であるようだ。

(3) 「勉強しろ。」(サ変動詞命令形)

標記の直接法を避けた表現、たとえば、
○シッカリ ベンキョーセナ ダメジャ ナイ カ。
木曾福島
のようなのを除外する。

以下に、13地点における「しろ」の部分抽出する。
1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13

オシロ セシ シラシ セロ シ シ シ シ シ
イロ ヤー ヤー シロ シロ シロ シロ
イロ ヤー ヤー シロ シロ

これによると、「シロ」などの東部方言的な言い方は、主に、地点7(木曾福島)以東である。地点1(中京)から地点6(馬籠)までは、諸種の西日本的な言い方が見られる。

(4) 「見送りのあいさつ」

○サヨーナラ。マタ キテ ネ。キオ ツケテ ネ。
<上・中>守山
このように、「サヨーナラ」「キオ ツケテ〜」の言い方が、全地点に行われている。

木曾福島から鴻巣にかけて、
○アバ イシー。木曾福島
のような言い方がある。「アバ ネ。」「アバアバ。」などもある。

4 複雑な個別的分布相を見せるもの

(1) 「どこへ行くのか。」

この文体差は、顕著である。上待遇表現態についてのみ記述する。これは、各地点ごとにみな、表現が異なっている。それらは、次のとおりである。

- ドコー オイキヤス ノドス。京都市中京区
- ドコ イカハリマス アー。守山
- ドコ イク ノー。醒ヶ井
- ドチラエ オデカケデス カ。美江寺
- ドコ イキナレル カ。御嵩
- ドコ イク イン。馬籠
- ドコ イク イシー。木曾福島
- ドコエ イク ち。洗馬
- ドコイ イキヤス。上和田
- ドコエ オデカケニ ナリマス カ。高崎
- ドコ イクンデス カ。鴻巣
- ドチラエ イラッシャイマス カ。板橋

上記を見れば、各地点ごとに、敬語法の体系の存在していることがわかる。

(2) 「雨が降るだろう。」(推量表現)

京都から美江寺まで、「〜ヤロ」が聞かれる。「〜ヤラ」が、御嵩だけに見える。この「〜ヤラ」は、岐阜・長野県境を南北に辿って分布するものである。群馬県の高崎には、「〜ダラ」がある。「〜ペー」は鴻巣にあり、東京では「〜ダロー」「〜デショー」が行われている。

中部地方域における推量表現の実態は、拙論(「中部地方域方言の推量表現の分布について」「国語学」第110輯, 1977年)において考察した。

さて、推量の助動詞を用いない推量表現で、興味深いものが、若干ある。

○ヒョット スルト アメカモ ワカラン エー。

<上>中京

○アシタ アメガ フルノト チガウ カー。<上>

中京

これらは、いかにも近畿的な言い方である。また、比況の推量もある。

○虫が トブデ アシター アメラシー ネー。<上・中>守山

これなどは、推量よりは推定とされようか。その他、一般によく耳にするのが、次の言い方である。

○アメが ラルカモ シレナイ ネー。<中>高崎

○アシター アメジャ ナイ。<中>板橋

(3) 「そんなにたくさん着たら暑かろう。」(推測表現)

京都では、「〜ヤロ」でなくて、このさい、
○アツイント チガウ カ。

と回答された。守山から美江寺までは、先の「雨が降るだろう。」と同様に、「〜ヤロ」が主である。御嵩に、やはり「〜ヤラー」があり、馬籠から上和田まで、「〜ズラ」がある。高崎では、「〜ロー」があり、「〜ダラー」とはなっていないのが注目される。鴻巣では、「アツカンペー」、板橋は、「アツイデジショー。」である。

(4) 「結婚のあいさつ」

四つの発想法が認められる。**【嫁ほめ】**は、京都にある。

○オタクサン コンド マー エー オヨメサン
モライヤンテ オメデトー サンドス。中京

守山では、**【良縁ほめ】**がある。

○オタクサンモ リョーエンガ ゴザイマシテ オ
メデトー ゴザイマス。ヨロシユー オシタ ナ
ー。守山

醒ヶ井から木曾福島までは、**【目柄ほめ】**である。

○コンニチワ オヒカ⁰ラモ ヨロシク オメデトー

ゴザエーマス。美江寺

賄川以東では、漠然と **【學式ほめ】** が見られる。

○コノタビワ オメデトー ゴザイマス。鴻巣

西方から東方へ向かうほど、結婚のあいさつの発想法は、即物的なものから、しだいに婉曲的なものへと移っていくようである。

以上、表現法19項目について、中仙道13地点における諸事象の存立状態を分析し、記述した。

三 まとめ

まず、アクセントについてまとめる。次下の表で、地点と地点との間に引かれた線は、そこに、事象の分界があることを示す。地点間にアクセントの異語事象

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
地点名	中京	守山	醒ヶ井	美江寺	御嵩	馬籠	木曾福島	賄川	洗馬	上和田	高崎	鴻巣	板橋
異語事象の数	32	94	108	36	23	12	5	11	10	13	26	32	

数を書き出している。数字が大きいく程、対立は大きい。

地点3（醒ヶ井）と地点4（美江寺）との間に、顕著な分量のアクセント分界線が存する。次いで、地点2（守山）と地点3（醒ヶ井）との間のアクセント分界線が、目立つ。他は、前2者に比して問題にならないほど少ない。したがって、アクセント面について、次のように言える。

中仙道域全13地点では、地点2（守山）から地点4（美江寺）の間に、東西アクセントの混交地帯があって、甲種から乙種への漸移状態が存する。地点3（醒ヶ井）の特異なアクセントは、甲と乙との中間的なアクセント状態を表わしている。また、地点12（鴻巣）のアクセントが、周囲のと少しく異った特色を見せる。いわゆる曖昧アクセントごみである。ために、地点11（高崎）との間に26本、地点13（板橋）との間に32本の分界線が存することとなった。

次に表現法項目で見られた諸事象が、中仙道13地点上に、どのように存立しているか。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
地点名	中京	守山	醒ヶ井	美江寺	御嵩	馬籠	木曾福島	賄川	洗馬	上和田	高崎	鴻巣	板橋
異語事象の数	5	4	6	4	11	8	8	2	5	5	5	4	

文表現面では、地点5（御嵩）と地点6（馬籠）との間に、大きな区切れめがある。これは、岐阜県と長野県との境でもある。また、明治以来周知の、親不知・浜名湖線の一部でもある。しかし、馬籠と木曾福島との間、木曾福島と賄川との間にも、8本の分界(境界)

線がある。つまり、御嵩と賄川との間に、27本の東西方言を分界する異語線が、存するのである。おおよそ、木曾路が、中仙道域13地点の方言においては、東西方言の分界地域であると言えよう。

さて、アクセント面でのまとめの分界線図表と、文法（表現法）面でのまとめの分界線図表とを、比較せられたい。分界線の多寡の様相が、必ずしも同じような結果には、なっていない。

中仙道という古街道に、13地点を定め、それについての方言文化の対比研究を試みた。東西方言の漸移動態が、このように、事象ごとに分野ごとに異なる現実が、確認されるのである。

（注1）これは、『方言の山野』（藤原与一先生著、文化評論出版、1973年）に掲出された「表現法調査要項」に負う所が甚大である。

（注2）東西二大方言の接衝地域におけるアクセントについての研究の、主なものは、次のようである。

- 服部四郎氏「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」（『音声の研究』第3輯、1929年）
- 柴田武氏「揖斐川上流のアクセント」（『日本語のアクセント』中央公論社、1942年）
- 金田一春彦氏「愛・三・岐・県境付近の方言境界について」（『国語国文学論集』、1973年）
- 奥村三雄氏編『岐阜県方言の研究』（大泉書房、1976年）

（注3）動詞「ゴザル」の全国状況は、『方言学』（藤原与一先生著、三省堂、1963年）に記されている。

1978. 9. 10

<付記>

本稿は、第5回広島方言研究所ゼミナールにおいて口頭発表したものに、加筆訂正を行ったものである。

表I アクセント(語・文)の図表

地番	型	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	A-7	A-8	A-9	A-10	A-11	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	C-6	C-7	C-8	D	E	F	G		
1	中京区 (京都府)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
2	守山 (滋賀県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
3	醒ヶ井 (滋賀県)	oooo	oooo	oooo	oooo	oooo	oooo	oooo	oooo	oooo	oooo	oooo																					
4	美江寺 (岐阜県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
5	高御 (岐阜県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
6	籠馬 (長野県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
7	木曾福島 (長野県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
8	費川 (長野県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
9	洗馬 (長野県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
10	上和田 (長野県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
11	高崎 (群馬県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
12	鴻巣 (埼玉県)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
13	板橋区 (東京都)	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////	////																					
該当		19	17	2	1	2	1	1	2	2	1	1	16	2	4	3	1	3	1	2	13	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
準該当		2	9	0	0	3	0	0	0	0	0	0	6	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	0	0	0	0	0	0	0
合計		21	26	2	1	5	1	1	2	2	1	1	22	2	7	4	1	3	1	2	13	3	1	1	7	2	1	1	1	1	1	1	

A Dialect-Geographical Study on Dialects of Chūbu Areas in Japan (3)

— A Comparative Study on Dialects of thirteen places in Nakasendō Areas —

Yoshio EBATA

Conclusions obtained from this study are as follows.

I In the field of accents;

- 1) Mixed conditions of East and West accents in Japan are found between Moriyama and Mieji in Nakasendō Areas. The accents of Samegai situated at the middle of those two places, are Keihan accents mixed with Tōkyō accents.
- 2) Accents of Kōnosu in Saitama Prefecture have particular features different from those at other twelve places. Vague accents are found at that place.

II In the field of grammar;

- 1) There are many contrasts of the grammatical phenomena between the west of Mitake and the east of Magome. A border line between Gifu Prefecture and Nagano Prefecture lies there; and a division line of East and West Dialects in Japan which was discovered in Meiji Era by an Investigation Committee of Japanese, exist there, too.

But through this study, it is recognized clearly that far many contrasts of grammatical phenomena are found at the places between Mitake and Niekawa. Boundary zones of East and West Dialects in Japan are recognized along Kiso Way.

This paper is a part of "A Dialect-Geographical Study on Dialects of Chūbu Areas in Japan", and also a part of "A Study of Generative Histories on Dialects in Japan".